

# 黒川本日蓮聖人註画讃の 写音法

山 田 忠 雄

一

国学者 黒川春村の旧蔵書が過般の戦災にうしなはれず、真頼・真道・真前と四代つたへられたのち、戦後そのいへをいづるとき、あつかった書肆のはからひにより、部門ごとに各大学図書館に分蔵せられ、他家の蔵書のごとき散佚を未然にふせぐことができたことは、不幸中のさいはひとして斯学研究のために同慶にたへない。勿論、おほくのなかにはみぎのルウトをとらずに流出したもののあつたことはいなめないが、戦前戦後を通じそのかずが比較的少数にとどまつたこともまた事実としてみとめねばならぬ。小論でとりあげる註画讃ももと黒川本の 釈教部にあつたものである。筆者はいまをさる十数年前にその資料的価値に着目し週日調査するところがあつた。爾来同類の資料のいづるをまっしてあはせ論ぜんとまつことひさし、つひに今日にいたるまでたえてそのことをきかぬので、このたび稿をもとめられるままにそのりの手写本をとりいだし、小論をつつた次第である。

二

この註画讃は慶長初年をくだらぬころとおほしきころの書写に属するゑまき五巻で、現在のはたて五寸六分、よこ四寸の帖じたてになつてゐる。ゑがらと彩色とは奈良絵本風の、比較的雅拙なものであり、ほほ時代をものがたるといへよう。登場人物名を説明するためのはりがみは本文よりはやおくれる。

つぎのごとく、大小不ぞろひの料紙をついだものを閲読の便をはかり帖にしたててあるので、みためにもさのみ奇麗なものとは評しがたい印象をいだいたことを記憶する。第一巻は二十四紙、第二巻は三十二紙、第三巻は二十九紙、第四巻は四十四紙、第五巻は二十九紙よりなる。各紙の寸法はつぎのごとし。

〔單位は 尺〕

	第一卷	第二卷	第三卷	第四卷	第五卷
紙	1.28	0.72	1.72	0.15	0.40
	0.93	1.69	1.70	1.68	1.68
	1.64(繪)	1.69	1.69	1.68	0.68
	0.71	1.00	0.78	1.68	1.68(繪)
5	1.24	1.69(繪)	1.67(繪)	1.68	1.00
	1.66(繪)	1.68(繪)	0.89	1.67(繪)	1.50
	1.67(繪)	1.70(繪)	1.68	1.68(繪)	0.77
	0.42	0.69(繪)	1.69	1.67(繪)	1.68(繪)
	0.74	0.68	1.67	1.64	1.68(繪)
10	1.65	1.69	1.68(繪)	0.92	0.90
	0.89	0.21	0.83(繪)	1.66(繪)	1.235
	1.70	1.69(繪)	1.66	0.75	1.68(繪)
	1.66	0.84(繪)	1.68	1.68	1.67(繪)
	1.66(繪)	1.36	1.68	1.68	1.44
15	1.67(繪)	1.68	1.69	1.06	1.68(繪)
	1.64	0.18	1.69	1.66(繪)	0.69
	1.46	1.67(繪)	1.69	1.68(繪)	1.69
	1.67(繪)	1.44	1.69	0.82(繪)	1.70
	1.67(繪)	1.68(繪)	1.34	0.61	0.42
20	1.68(繪)	0.83(繪)	1.67(繪)	1.23	1.67(繪)
	1.70(繪)	1.68	1.69(繪)	1.67(繪)	1.67(繪)
	1.67(繪)	0.32	1.69(繪)	0.45	1.67(繪)
	0.98	1.68(繪)	1.69(繪)	1.69	1.61(繪)
	1.67	1.69(繪)	1.69(繪)	1.68	1.67(繪)
25		1.67(繪)	1.69(繪)	0.18	1.05
		1.02	0.45(繪)	1.65(繪)	1.67(繪)
		1.67(繪)	1.68(繪)	1.50	0.93(繪)
		0.35	1.70(繪)	1.69	1.42
		1.69	0.15	0.52	1.68(繪)
30		1.29		1.23(繪)	
		1.29		1.72	
		1.69		1.27(繪)	
				1.13	
				1.69	
35				0.835	
				1.69	
				1.68	
				0.82	
40				1.69	
				1.69	
				1.10	
				1.685	
				1.67	
				0.82	

構成はつきのことである。

〔第一卷〕

寛永九年三月中野市右衛門刊本・天和三年二月鱗形屋版  
御誕生第一〔目録ハ 御ヲ欠〕

登山出家第二

学問第三〔目録ニハ 遊学〕

宗旨建立第四〔目録ハ 建立宗旨〕

安国論第五〔目録ハ 造安国論〕

第一卷第一紙の冒頭に二行にわたってつぎの内題がみえる。

日れん。大しやう。にん。ちう。くハ／さん 三十二。へん。あり

書題は慶長九年刊中野版とおなじく、直下の説明はかれにはみえぬ。

第六。ようち。諸宗夜討第六

ちうぐわさん。第二の。まさき。

第七。いとふへ。ながされ。給ふ事。伊東左遷第七

第八。りうさう。立像釈迦第八

第九。せいくほうき。ぼし事也。文永慧星第九

第十。御は。よみ。返り給ふ。慈母蘇活第十

第十一。とう。しよう。御なん。東条小松原

第十二。もふこの。でう。蒙古狀第十二(目録ハ蒙古

第十三。十一つうの。じよう。一通狀第十三(目録ハ十

第三のまさき。雨折勝負第十四(目録ハ祈

第十五。きやう。ひんか。しやう。行敏か狀第十五(目録ハ

第十六。たつの。くちの。御なん。竜口頸座御難第十六

第四の。まさき。〔末尾ニ「極月十四日 歳廿七書之」トアリ〕

〔第十七〕。ゑち。御なん。赴ニ依智第十七

第十八。ろう。ちうの。しよう。籠中遺狀第十八(目録

第十九。さとの。御なん。佐渡流刑第十九

第廿。もんたう。諸宗問答第二十

第二十一。しけ。つら。つい。らい。重連進来第二十一(目

第廿二。印性坊。みんしやうほう

第廿三。あまの。もんたう。印性坊第二十二(目録ハ印

第廿四。せんし。しよう。尼問答第二十三(中野ノ目

第廿五。しやめん。前司狀第二十四

第五まさき。赦免狀第二十五

第廿六。みのおふさん。重認頼綱第二十六

第廿七。もつこ。きたる。身延山入第二十七(目録ハ

第廿八。りうそう。はうが事。蒙古来第二十八

第廿九。御にうめつ。竜象房第二十九(目録ハ古来)

第三十。しゆ。こつ。示寂第三十

第三十一。もくろく。御書目録第三十二

第三十二。おさめとるゆいこつを。収取遺骨第三十一

〔中野版、鱗形屋版ノ目録ハ古

活字版ニヨリテ附シタモノト

オモハレル。古活字版デハ目録

相違ガミラレス。]

四

そもそも日蓮聖人註画讃は 円明院日澄の撰になる日蓮の一  
代記であり、古写本のつたはることは、まれに、漢文体の古活字  
版は慶長六年より寛永四年にいたるまで六次にわたって開版  
せられ、ひらがな大きくだしの整版は寛永九年・同十三年・天和  
三年 および無刊記数種が刊行せられ、同一撰者による抄も

おこなはれてゐる。整版にはすべて絵があり、その表記とあひまっておほいに民間に滲透したものとみえるが、改題本絵入り蓮御一代記等にいたっては、書題自体に通俗性をもちこんだ書肆の商魂が顯著にうかがはれる。小論でとりあげる註画讚は、その構成・系がら・行文のいづれよりも中野版・鱗形屋版と異曲同工の書であることはあきらかであり、そのもつともおほいきい特色は前節にかかげた目録の対比によつてしられるとほり、かながきに徹し、語と語、もしくは造語成分間の区分意識はなはだつよいといふことであるが、やがて本文にはひれば文節間の区分意識がこれにくははる。中野版・鱗形屋版に比すればよつがな・開合は問題にならないほどみだれてゐる。それはこの本が上記二書におくれることの証左ではなくして、勿論、これら二書においては刊行者の反省とていれとがくははつたために、みだれを比較的すくない範圍にとどめたものにすぎない。中野・鱗形屋両版では、一段・二段活用の終止形に接続するベシが、この本では未然・連用形からつづき、くづれた語法といふ印象をあたへるのもまた同様の現象にほかならぬ。

この註画讚の写音法として注目すべき第一は濁点に普通の二点にまじつて三点をもつてするものが、はなはだおほくもちゐられてゐる事実である。目録においてはさやうなものを\*でしめたが、本文においてしめるわりあひも目録におとるものではない。三点による濁点は、もと漢字の声点のうち、濁音の表記としてもちゐられたゝから一転した四点〰〰〰の省記かといはれ、管見によれば、伝今川了俊筆と称される古

筆切においてもちゐられている朱書がもつともふるいのではないかとおもはれる。それは各籍紳家・古社寺の秘庫に蔵せられる古筆手鑑のなかに分蔵せられるにとどまり、本のかたちでは今日みることができないやうである。その意味においては逸書ともいへよう。そのうつすところの本文はいままでのところすべて源氏物語の夕顔巻にかぎられる。句点をおほくほどこしてあること、この註画讚とあひにる。(第一図参照)

また、了俊と同時代人であつた世阿弥のかきのこした能楽書のなかにも、二点にまじつて三点をくはへたものが散見する。たとへば、カタカナがきの能本七番(書店刊)のなかでは江口・盛久・タタツ・柏崎にそれぞれ一・二・二・一例の使用をみる。ひらがながきの花伝第六花修にも二点にまじつて三点の使用せるもの五例がみとめられる。なほ、布留・難波・阿古屋にもそれぞれ類例が四・二・二例かぞへられるが、松浦之能にはみえぬやうである。(世阿弥筆といはれるものうち五音上下は五音ぬき書上下・音曲之内々六の大事は二点のみ。花鏡・風姿花伝は濁点を一切有) これら世阿弥の書には分別書法かともみとめられるものや入声音や促音をあらはずのつ小書がみえ、発音を忠実につたへる努力をはらつたひとつの結果として附随的に三点がもちゐられたものではないかとかんがへられる。

つぎに著聞するのは平家物語屋代本および平松家本の傍訓である。前者の本文は流布本に同ずる点とそれ以前の文飾をまじへぬ面とを包蔵するが、他と用字のことなるものすくなくからずみえる点などからみればかなりきぎきの要素をもふくむものといつてよい。後者の本文は百二十句本の源流と

密接な関係を有するものとおぼしく、かたり本を筆録したものとかがへられる特徴が顕著にうかがはれ、ために借字・誤字と目されるところのものがきはめておほい。傍訓また同様であり、類本では解釈のつかぬものや、誤記が未修整のままに今日につたへられたとおもはれる部分が随所にみられる。おなじ平家物語でも舎弟 俊雄蔵するところの 木村良一本の一本は、全巻ほとんどかながきであるうへに、まきによつては濁点を三点を主用する。これらの三点資料すべてにわたつていへることは、一旦筆録した言語に対して分析的な反省をくはへた文献乃至なにほどかきぎの性格をもつ文献に附随してゐるといふ事実である。大久保彦左衛門 自筆と称せられる三河物語も三点資料としてふるくからしられてゐたが、その根本的性格もみぎの例にもれるものではなく、この種の表記をとつた資料のなかではおくれるものひとつではないかとおもはれる。勿論、三点資料は以上のみにつきるものではなく、机辺にたちどころに次下十数点をみいだす。

和玉 篇中 岡田真氏旧蔵天 濁点をほどこすこと周密に、なかにすくなくとも二ヶ所 三点がもちゐら

玉 篇 略理図書館一七八五 濁点を附すること比較のまれであるが、そのなかにすくなくとも一ヶ所 三点がもちゐら

和玉 篇 一上 岡田希雄氏旧蔵 濁点のほとんどすべてが三点。特にみだし字の右傍にほどこさ

拾篇目集 旧上野図書館蔵 貴6147 館であらたに附した書題簽に由

利半左衛門筆としるす。濁点は二

点。三点が一例みられる。おほくは

濁点をほどこすことさのみ。おほくは

濁点が、なかにすくなくとも二ヶ所 三

点がもちゐられる。

新編訓点略玉篇 日本大学図書館蔵 首尾佚

濁点をほどこすことさのみ。おほくは

濁点が、なかにすくなくとも二ヶ所 三

点がもちゐられる。

新編訓点略玉篇 卷第二 岡田真氏旧蔵 八例 二点主用の間に、すくなくとも

二点 二点をまじへる。

下学 集上巻 岡田真氏旧蔵 時永正十四丁丑年 南呂上旬書之の識語

あり。二点の間に二点・四点をマストシ

る。師題の注に一語人事繁二をコトシ

キヨウシテと訓じたりする。

下学 集故猪熊信 卷末ハ曾瑞泉の語を録し、おくに天文十九年二

月日柴田弾正忠書としるす。二点の間に二

かつ 拗音・長音の表記に注意すべきものがお



れはおそらく婦女子乃至漢字の知識のとばしいひとが日常これを携行してよむことができるやうにとの配慮にいでたものであらうが、勿論このままではよみにくいので右傍に漢字を小書したり、句読をくはへたりしてゐる。それはまづ文節と文節のあひだ、語と語とのあひだ、またときには一語中の造語成分間のくぎりをもしめすことがある。これらの句読は朱点とすみの小圏とでもって二重にほどこされる。前者はいきがながく、後者はときに語の区分にまでおよぶ。したがって、大なるは両種のしるしが重複することになるが、その繁簡の差よりすれば、朱点をもつてさきとすべきであらう。繁に属するすみの小圏はよくみるに、手書ではなくして、ごくばそのふで印である。第一巻の冒頭数葉には印によるもののおひだにてがきによるものをすこしくまじへるが、第五紙以降においては徹底して小印をおす。語間の区分にはまゝ首肯できぬものをも包蔵するが、これらは濁点のうちちがへとおなじケヤレスミステクとすべきものかとかんがへる。このやうに語間の区分をあへておこなつたものとして吾人はただちに、かの広本節用集における水田町数の記載例を想起する。

伊勢 一万九千。二十四町

伊豆 二千八百。十四町

伊予 一万五千。五百七町

伊泉 一万七千。六百。十四町

これは同書が万葉がなによる地名の傍訓の各構成部分に朱で小圏をほどこすのとおなじ意識にもとづくもので、要するにかきてが極度に自省をくはへるときにこのやうなことがおこなはれるのではないかとおもふ。すなはち、一方は規範性が要求される辞書、一方は純粹の聖教ではないが日常読誦

の料に資すべき宗門書において、はからずもこのことがみられる。それは一面からみれば文学書においても医療書においてもおこなはれてよいものであり、現にそのやうな文献をいくらか実見してきたが、それらが一樣に濁点をおほく附してゐるのは決して偶合ではなく、いづれも自他によつてかかれた言語を口頭語へ復元する熱意のあらはれ、また端的なところみとうけとられるのである。この意味で稿者は、わがくににおいては句読の研究と濁点資料の研究とはほぼ平行してすすめらるべき面を有することをかんがへる。

さて以上のやうな意味で周密にくはへられた濁点のほどしかたも、まきによつて多少のゆるみがないではない。

- |     |     |     |     |      |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|
| ③ 1 | ④ 5 | ⑧ 1 | ⑩ 2 | ⑪ 1  | ⑬ 4 | ⑭ 1 | ⑮ 1 |
| ⑯ 5 | ⑰ 3 | ⑲ 2 | ⑳ 2 | ㉑ 10 | ㉒ 2 | ㉓ 3 | ㉔ 3 |
| ㉕ 3 | ㉖ 2 | ㉗ 2 |     |      |     |     |     |

前半においては、濁音の期待されるところに濁点が存しないもの十六ヶ所であるのに対して、第十六章たつこのくちの御なん以降にはかにさやうな箇所がふえてきたかにみうける。それはあるいは主人公のみにせまつた危難にエキサイトして言語に対する反省がおろそかになつたせるか、それとも単なる注意力のいたらないゆゑに帰すべきか、ここでは断案を保留する。それらと直接関係があるかいはなかわからないが、この第十六章はこの註画讃と中野版とを対校してもっとも異文のおほい部分であり、行文が躍動し、享受者間に変化を生じてゐることだけは事実のやうである。

さて叙上の表記によつてこの註画讃の清濁上の特徴の一

端をのべるならば、つぎのごとくならうか。

号すーごうす②③〔中野版ハがうす〕海上かいじやう⑤ 仇ーあ

だ④⑨⑪〔中野版ハあたモシクハ怨敵〕あだがたき⑨ あだむ

⑦〔中野版はにくむ〕

叙上すべて長二点によるもの。後補とかんがへられる。

身体ーしんだい⑬〔中野版モオナジ〕引率ーゐんぞつ⑭ 呪咀ーし

ゆそ⑭〔中野版モオナジ〕

叙上三語の清濁は節用集乃至キリシタン文献と共通する。

副元帥ふくげんすい⑤〔⑫ハふくげんすい〕医ーくずし⑦⑧ 官

使ーくわんじ⑦〔中野版モオナジ〕誦しーじゆじ⑭⑮⑳〔中野版モ

オナジ〕小雨ーこざめ⑭⑮〔中野版モ再出ハこざめ〕邪見ーじやげ

ん⑮ 天神地祇ーてんじんちぎ⑯〔中野版モオナジ〕月天子〔明月

天子 ヲモフクム〕月てんじ⑯⑰⑱ 明星天子ーみやうじやうてん

じ⑰⑱ 真言宗ーしんごんじう⑲ 真性ーしんじやう⑲

みぎのうち、数字をゴシック体でしめたものは長二点によるもの。他の諸例とは次元をことにする。

五

前節において、句読および濁点がおほくほどこされてゐる

ことをもって、この註画識が自省をくはへられたものとかん

がへたが、その傍証としてミセケチのおほく存することをこ

こにあげる。「・」をもつてミセケチにかへる」

〔巻一〕この／みきわに。すこしの。みづあり。① やくおう。ま

ると。ごうす。② をなしき。みかと。② ちゑを。こくうぞ

うに。いのりたまふ事。② なんぢに。ちゑを。あたふと。い

ながら。② ほたるを。あつめ。とほしひとし。③ さいし

やう。ななふき／の。こをり④ 大ちからの。こく／の物。④

なこい。まつは／か。やつに。うつり。⑤ まいにち。なこい／

の。みちに。いで。⑤ をなしき。二ねん。八月一日／に。

⑤ 大みつ。および。ききん。やく。ひやう。⑤ をなしき。

⑤ 三ねんまで。やまず。⑤ あるいは。ぶんおうとあらた。むれ

とも。⑤ 八月に。いたつて。いよく。おこり。⑤ ふくげん／

すい。たゐうの。ときよりに。⑤ のとどの。だんな。しん

じ／たらうを。はじめとして。⑥ 能登坊。

〔巻二〕日れん。ゆるしたまわず。⑧ 日れん。たまわく。⑧ な

みうち。きわに。し／て。⑧ かまくら。御ほん／いの。しやめ

ん。しやう。きたる ⑧ たしまこう。日ち／なり。⑧ てん

の。わざ。わひを。もつて。⑨ ちのわざ。わひを／もつて。

⑨ すまんそふの。ひようせんを／うかべて。⑨

わさわひは。たいとう。てん／ちく。につほんの。うちには。い

まだ。見へざる。わさわひ／なり。⑨ にち／れん。かなしみ

に。たへず。ちかい給ふは。⑩ あまつの。むらに。おくり。⑩

かまくらに。おくり。たてまつり。⑩ けんてうしの。たうり

よう⑬ るばい。しざいは。いちやう／のみ。⑬

〔卷三〕 やまふの。おこりを。しらすして。しすれば。⑭ すわふ

ぐうと。いりさわ。にうたうとを。まねるて⑭ ちかい／しよ  
うしやうと。しさんし。⑭ いわんや。こせの。一大したる。

わふ／しやうに。おゐておや。ごせ／を。おそれ。たまはゞ。⑭  
以上を 通観するに、ミセケチの うち 訂正部分が 小字で 傍書さ  
れたのは とほしび・日ぢ<sup>せう</sup>二ヶ所にとどまり、あとはすべて未  
処置である。されば、その 自省は 未完にをはってゐることあ  
きらかであり、同類にしてその 処置をうけないものも 多多存  
するところからすれば、さのみ 周密とも 評しがたからう。しか  
しながら、たまたま 以上の 箇所それがみえることは、なほ  
その かぎりにおいて 一旦 かきをはったのちに 自省する 余裕が  
他文献よりは なにほどこか おほく あつた こと、換言するならば  
自己の 言語を 分析的な 態度で みる かたむきが あつた ことを  
率直に みとめざるを えない。さきに 吾人が、徹底せる かながき  
をもつて 婦女子にも よめるやうにと 平明な 表記を ころがけ  
たものかと 推したところのものも、あるいは しからずして こ  
の 註画識の 著者の 異常とおもはれるまでの 分析癖によると  
あらため かんがへるべきではないか。しかうして 叙上の ミセケ  
チは、つぎに 分類するとき かなづかひの 相違に 基因する。

みぎわ なみうちぎわ わざわひ四例 ゆるしたまわず のた  
まわく  
をなじき三例 おくり二例 おこり二例 おゐておや おそれ  
たまはゞ やくおう および

いながら あるいは ちかい給ふは たぬう

こくうぞう さいじやう こうの物 しやめんじやう ひよう  
せん けんてうじ だうりよう 一ぢよう しようじやう

前群は W↕H、Y↕O、I↕H↕K の かなづかひに、後群は 字  
音語の 開合に 関するもの。おこり二例のうち、まへなるは 動  
詞の 例であり、行間にをとはりがみしたあとが みられる。か  
やうな はりがみが 他にも すくなからず 存することも、この 註  
画識の 筆者の 旺盛な 反省のあとをしめすものと 目される。  
おゐておや において おや と するとき、格助詞を おと  
かく 例は 他に もう 三例 みいでる。

第五の。まきを。もつて。かおゝうつ事。みたび。⑭

二人の。いわく。かくの／ことくの。あくきおは。なにとて。  
せめさる。⑭

なを。もつて。い／ほんの。物おは。ちうしん。せらる／べき。

のよし候。⑭

すわぶぐうは、中野版に 周防公とするところのもの、これは  
合音内の 一種の かなづかひに 関するものとして 最近、斯学研  
究の 徒の 視聴を あつめてゐる。類例としては つぎの 二例を み  
る。

そうあんを。いてゝ。みなみに。むかつて。たちたまふ。と  
き。いわせの。太郎。あつくう／して。ころもの。そてを。ひ  
く。⑭〔中野版ハ 悪口して。コノ 本ニモ あつこうノ 例ガ 他ニシ  
ル〕によらいの。めつこに。かしょう／とうの。そんしや。しや。  
りを。ひろうか。ごとし。⑭〔中野版ハ 迦葉等の 尊者〕

かなづかひに 関せざるがごとく おもはれる のとどの も、左傍に 能登坊と 小書してあるが、絵の 説明書 および 中野版には 能登公とある ので、もと 上記とは 無縁では なかつたのである。⑤ぶんおうに 連声音を のとしめた ものと 同巧は ④あんおんにも みられ、また ⑩の まぼつて、中野版の 田波川を たはがわ③ とする のも 表記と 発音との あひだの へだたりを ちかづけんと の ころみと おもはれるが、こへを。はかりに ⑤は いただけない。ほけきやうを。みぎり⑨は、ききがきとしての 証 歴然たるものがある。

六

この 註画譜の 写音法 の 特徴の 第二と みるべきは、その 促音の 表記である。促音の 表記は 古来 不安定であり、あるいは 撥音と おなじく くハ、また その 変化である ン、さらに 後者

○を くは へた	促音表記	0	1	2	0	6	0	4	0	6	1	0	1	9	9	11	14	12	0	3	0	0	1	0	8	5	2	1	2	1	1	3	2	0
		1	0	0	2	0	0	2	0	0	2	0	0	0	2	3	5	2	2	3	1	5	3	3	0	1	2	2	2	1	1	3	2	0
○を もちぬない	促音表記	0	1	2	0	6	0	4	0	6	1	0	1	9	9	11	14	12	0	3	0	0	1	0	8	5	2	1	2	1	1	3	2	0
		1	0	0	2	0	0	2	0	0	2	0	0	0	2	3	5	2	2	3	1	5	3	3	0	1	2	2	1	1	3	2	0	

卷一

卷二

卷三

卷四

卷五

の ひらがなである ん をもつて するもの、無表記であるもの、つ をもつて するもの、カタカナツを 小書するもの等 諸種の 方法が いられてあるが、この 註画譜は その いづれとも ことなり 直前の かなの 右傍に ○といふ しるしを くはへるものをもつて 主流とする。漢字の ばあひは、当該の 文字に これを 附する。この 墨記の 小圏は 四 において のべたところの 句読が 小印であるのとは ことなり、すべて てがきである。小圏にくはへた / が 促音のもつとも 具体的な 標示といへよう。もつとも、この ○は、訓点本において 濁音の 標示にも ちめられたところのもの、転用といへなくもない。はたして しかれば、その ばあひには その 仲介者として 訓点者流を 予想せねばならぬ。

この 促音の 標示も また、濁点の ばあひと おなじく、すべての 語にも なくくはへて あるのではなく、まきによって かなりの ゆるみが みられる。

と目される。

名詞で かかる 促音表記 ○ をもつものは つぎのごとし。

につぼんごく三例 につぼんごくちう につぼん第一 につば

ん (日ほんごく・日ほん第一ハ スベテ 促音ノ 標示ナシ)

ほつし二例 (他ニ しようくうほつし・ちこくほつし・のうらんほつ

昂調と 表裏し、全体の 構成が 序・破・急を たもつてある ゆゑ

し・日れんほつし・ぞうきはつし ノ 例アリ。コノ 註画譜ニ

ハほうしノ例ハミエス)

。りつしやうあんくろん  
 。ほつけ二例。ぶつぼう ぶつくわ ぶつちよく。せつば  
 う しゆつけ。かつせん 大しつきやう(集経)。べつたう  
 あつこう・あつくう(悪口) あつけん(悪見)  
 ねんぶつしや<sup>24</sup>(他ノ例ハ促音ヲ有スルカイナカ不明)  
 うつたへ うつたへじやう

〔ウヘニ冠シタ。ハ促音標示ヲ有セヌ 語例モミエルモノ〕  
 やつこ(歎)<sup>13</sup>〔キリシタン文献デハ促音トナッタ例ヲミナイ。

促音ノ例トシテハ比較的ハヤイモノトミトメラレル。チナ  
 ミニ平曲デハやつこトイフラシイ)

ツギノ語ハ促音標示ヲ有セズ

ばつそん しつと おつと べつ太郎 につくわん

にほんごく<sup>24</sup>

。さいしゆじやう まつのき。一ばん 一しうき 十そく。

十しやう(十即十生)

ツギノ語ハ促音標示ヲ有セズ

一さいきやう 一くわん 一せんぢやう(二千町) 十

へんばかり 十はう。せかひ(十方世界)

用言でかかる 促音表記〇をもつものは つぎのごとし。

あつて五例 あたつて。あつまつて いかつて二例。いた

つて二例。うちかこつて<sup>16</sup>〔中野版ハ打かこんで〕。かたつて

かへつて三例 きてつて二例。きたつて四例 やくそくに たが

つて<sup>16</sup>〔中野版ハやくそくを。ちがへて〕。たもつて たつて

二例 つくつて つらなつて なつて三例。のぼつて。む

かつて六例。…によつて五例。(…を)もつて九例

あまつさへ<sup>15</sup> うつたへられ(オヨビソノ変化)三例 たてま  
 つて(奉)<sup>16</sup>

。たつとく(オヨビソノ変化)二例 たつとぶ

アマツサヘ・タテマツテは、普通かながきのアマサヘ・タテマ  
 テおよびキリシタン文献のロオマ字がきによつて語の存在を  
 確認するのであるが、この註画讃の特殊の表記法によつてもそ  
 の事実をしりうることは貴重すべきものとかんがへる。

ツギノ語ハ促音ノ標示ヲモタヌ。

きおつて<sup>14</sup> おもつて<sup>15</sup> うけたまわつて<sup>17</sup> とつて

(問)<sup>17</sup><sup>21</sup><sup>23</sup><sup>26</sup> おつて(折)<sup>27</sup> おわつて<sup>31</sup>

じやくせう(寂照)と。いつし物<sup>7</sup>〔コレヨリサキ、しよ

うくう。ほつしと／＼し物 トイフ 表現 ミユ〕 しつし

(執)<sup>15</sup> べつして<sup>18</sup> ばつせんこと<sup>29</sup> もつとも<sup>30</sup>み

ぎのうち、きおつて・おもつては中野版にそれぞ

れきそつて・おもんじてとみえる。とつての例は、

中野版<sup>17</sup><sup>23</sup>は問て、<sup>26</sup>はとふてとあるが、<sup>21</sup>は問

てとあつて二本共通である。トツテといふかたち

は今日でこそめづらしいが、この註画讃ではウ音便

は第十四話以降につきのごとくみえるにとどまり、

他はおほく 促音便をとる。

なを。一七日。いのらんと／＼こふて。<sup>14</sup>

此御はう／は。日れんはうが。てしなりと。いふ／て

②② しゆ／くの。物を。になひ。おふて。②⑤

その／とき。ねんぶつしや。はからう／て。いわく②⑥

ふかき。やまちに。たきゞを。ひろうては。②⑦

トツテといふ音便形は漢籍、ことに論語の訓読に

頻出する。国訓本論語ではトツテに伍してトフテ

もほかの かつちと共存するに對して、広本節用集

態藝門に引用せるは、そのことごとくを統一的に

くよみせることが注意せられる。

促音標示の は当該の文字の右傍に附せられるのが普通であ

るが、まれに左傍にほどこされることもある。その例、

このたひ。くひを。ほけ。きやうに。たて。まつて。その。

く。どくを。ち。は。に。ゑ／かうし。そのあまりを。てし

\* たん／なに。はふく。べしと。申せし／それ也。①⑥

\* かなしき。かなや。ほうの。とほしひ。たちまちに。きへ。し

／ひの。まなこ。ながく。とちて。せつ／ぼうの。みこへ。た

へしをワレワ申サストモハナモヨシキ／トイッへしとかい

てゐると同巧とかがへられる。ちなみに、本例のほかに、

たてまつての例もたてまつての例もみえない。

○と濁音標示と重複するときは、前半においては後者が優

先し、後半においては前者が優先する。

大ふつてんの。へつたう①③

このたひ。しやうしの。きつなを。きつ／て。ふつくわを。と

げたまへ。①④

あめの。いのりの。すこしの／事に。よせて。ぶつぼうの。お

ゝき。なる事を。さためん。①⑤

てんしん。ちきは。なんそ。りやうせんの。やくそくに。たか

つて。おふごを。くわへ。さらん／と。①⑥

こくしゆを。いさめん。ために。正ほうの。きやうしや／を。

まほつて。①⑦

そもく。みやう。月てんしは。ほけ。きやうの。ゑきに。つ

らなつて。ほうたう。ほん、のとき。ふつちよくをうけ。①⑧

しかるに、後半に属する②④にはつきのごとき例外がみえる。

そのころ。ねんぶつしやの。そう。たち。かま／くらに。こし

て。むさしの。せんし／に。うつたへて。いわく。

○の位置が つねよりもはるかに下方にあるのは、ふたつの

符号の衝突をさけようとする意図にいたたものであること、

既述のものと一般である。

この註画譜における、第二の促音標示はんをもっておこな

はれる。その例、

くう／ち<sup>\*</sup>うに。こえあつて。つ<sup>\*</sup>けて／いわく。しやう。ほう<sup>\*</sup>の。きやう。しやを。うしなはゞ。しそんめんし。こくどを。ほろほしなん。⑩〔子孫滅しノ意〕

この方法は、古文獻においても古辞書においても使用せられること普通に、枚挙にいとまがない(前者の例としては真如蔵旧蔵本雑筆抄の傍訓のひらがな、静嘉堂文庫蔵の化城咲草の傍訓のカタカナ、後者の例としては猪熊本下学集・国籍類書所収〔和名集〕一兩者ともカタカナが卑近な例である)。ただ、この文獻ではここ一例にみられるにすぎないものであることを注意するにとどめる。

七

六に引用せる諸文例にみるとく、この註画讃には半濁点かとみるべき例が散見する。これ、本稿においてももっとも強調するところなので、重複をいとはず つぎに全例をかかげる。しよ／しうの。くはんそ。とふ。かたく。しや／きに。しつし。ふかく。きやうろん／に。そむく。ふつぼうの。あだと／なる。④〔仏法〕

いま。よりのち。もふ／こ。すまんそふの。ひようせんを／うかべて。につぼんごくを。せめは。かみわふい。より。しも／たみに。いたるまで。ゑんぶ<sup>\*</sup>第一の。大なんに。あふへし。

⑨〔日本国〕

わがひろむる。ほけ／きやう。につぼんごくに。るふ／すべくは。はゝの。いのちを。たすけたまへと。はなを。おり。みつを。むすび。ほけ。きやうを。よみたまへば。⑩〔日本国〕  
うるう。正月十八日。大もふこ。ごくより。につぼんごくを。

おそふべきの。てうきたる。⑫〔日本国〕

にち／れんは。につぼん第一の。ほけ。きやうの。きやうしや。もうこ。こく。たいしの。たいしやうたり。⑬〔日本第一〕

あめの。いのりの。すこしの／事に。よせて。ぶつぼうの。おゝき。なる事を。さだめん。⑭〔仏法〕

しゆん。ぶう。さだまら。されは。そのこを。しらす。⑮〔順風〕  
此ところに。まつのき。一ぼんあ／り。けさかけの。まつといふ。⑯〔一本〕

大ふつてん／の。にし。くわか。やつにして。せつ／ぼうし。

ふしん。あらん。人は。きた／り。もんたう。すべしと。ひろう／すと。いへども。⑰〔説法〕

十三日の。たつのこく／に。はうへん。ぼんを。しゆし。大しゆ。とうおんに。これを。よむ。⑱〔方便品〕

かなしき。かなや。ほうの。とほしひ。たちまちに。きへ。し／ひの。まなこ。ながく。とちて。せつ／ぼうの。みこへ。たへたまふ。⑲〔説法〕〔第二回参照〕

勿論、みぎのぶつぼう(二例④⑭)に対してぶつほう⑳、につぼん(ごく)に対してにつぼん⑨・につぼん。ごく⑬・日ほんごく⑯・日ほん第一⑯〔⑳の〕ほんごくはおのづから異形とかながへる)の例がみえるし、また一方に十へんばかり④十はう。せかひ(十方世界)⑯の例もないではない。しかしながら、

その程度の違例は、句読にも、濁音・促音標示にもあったことである。例外のあることをもって法則の定立を躊躇する必要は毛頭ないものとおもふ。日本・説法・仏法・一本および順風の諸語すべて半濁音の成立すべき契機を十分にそなへて

る。これらの圈点が、句読の小印とはことなり、すべててがきであることはそれをくはへたかきでの意識において促音となんらかの關係にあるもの、なにほどか通常のかなのみで表記されるところの音とはことなるものであることを志向してゐるものと目される。圈点一個が非濁音の標示にもちゐられるからとしひざしいが、この註画譜において、他にそのやうなばあひにもちゐたことは一例もなく、ことごとくが半濁音の熟するケエスにのみかざられることは、おそらく単なる偶合にもとづくのではなく、なほこれらを半濁音の標示とみなしてよいことをものがたつてゐるものとかんがへる。

従来、半濁点を標示する小圈一個はキリシタン關係の邦字文献にはじまるものといはれてきたその通念に比して、時代はまさに伯仲するが、みぎの存在はいちじるしく通念をうちやぶるものといへよう。ここにおいてか吾人は傍例を大方に提示する責務を感じる。そのかずはいまだかならずしもおほくない。管見唯一の資料は下巻末に

嘉吉貳年七月廿一日書之 右筆喜阿行年一歳

としるす倭漢朗詠集の一古抄本である。胡蝶装二冊、両面書写で、一面五行、傍訓をほどこすこときはめて周密、おそらく類本中随一（語の新義においていふ）と評せよう。てならひ用のテクストであると同時に、美術鑑賞にもたへるべく書写された朗詠集は、ある意味において附訓を排するかたむきがある。古写本で傍訓をおもひおもひの方法でけつったものがおほいことはその事実をものがたる。しかしながら一方においては、よよの訓法、いへいへの訓法を忠実につたへんところのみた

ものもまれではない。総じて先儒研鑽のあとをそれによつてしりうるわけであるが、この嘉吉本もさやうな性格をもつた本といへよう。およそ三次にわたつて附訓がおこなはれてゐる。類本では、第一次の附訓は、テニヲハを主とするのがつねであるが、この本では事情がことなる。第一次にくはへられたのは傍訓全部もしくはその根幹部であり、かへつてテニヲハは第三次のものにおほくみられる。稿者が傍例としてとりあげんとほつするのは次下の傍訓における小圈である。

- 閏三月<sup>カケツ</sup> 2 60 還翻<sup>ハインソク</sup>ニ翻<sup>ニ</sup>于一月之花<sup>ニ</sup> 紅梅<sup>ベニ</sup> 2 98 仙<sup>セン</sup>一方<sup>ハツ</sup>之雪<sup>ユキ</sup>
  - 花<sup>ハナ</sup> 9 122 織<sup>オリ</sup>芳<sup>ヲ</sup>一<sup>ヒト</sup>芳<sup>ヲ</sup>一<sup>ヒト</sup> 納涼<sup>ナツゾウ</sup> 4 163 代<sup>タテ</sup>ニ岸<sup>カサ</sup>風<sup>カゼ</sup>一<sup>ヒト</sup> 九月尽<sup>クニツクシ</sup> 3 279 文<sup>フミ</sup>一<sup>ヒト</sup>峯<sup>ミネ</sup>案<sup>アヒ</sup>レ轡<sup>ヒ</sup>
  - 菊<sup>キク</sup> 1 267 一<sup>ヒト</sup>半<sup>ハ</sup>黄<sup>ワウ</sup> 晴<sup>ハレ</sup> 2 413 七<sup>シチ</sup>一<sup>ヒト</sup>百<sup>ヒャク</sup>一<sup>ヒト</sup>里<sup>リ</sup>之<sup>ノ</sup>外<sup>ノ</sup>
  - 文詞<sup>モンジ</sup> 1 475 浮<sup>ウ</sup>一<sup>ヒト</sup>漢<sup>カン</sup>聯<sup>レン</sup>一<sup>ヒト</sup>翻<sup>フ</sup>
  - 山水<sup>サンスイ</sup> 7 510 煙<sup>エン</sup>一<sup>ヒト</sup>波<sup>ハ</sup>一<sup>ヒト</sup>惟<sup>タカ</sup>新<sup>シン</sup>
  - 山家<sup>サンカ</sup> 4 562 王<sup>オウ</sup>一<sup>ヒト</sup>尚<sup>ショウ</sup>書<sup>ショ</sup>之<sup>ノ</sup>蓮<sup>レン</sup>府<sup>フ</sup>
  - 帝王<sup>テイオウ</sup> 10 667 文<sup>モン</sup>一<sup>ヒト</sup>鳳<sup>ホウ</sup>見<sup>ミ</sup> 親王<sup>シンオウ</sup> 5 675 一<sup>ヒト</sup>片<sup>ヘン</sup>煙<sup>エン</sup>
  - 丞相<sup>セイソウ</sup> 5 680 猶<sup>ユウ</sup>涇<sup>ケイ</sup>渭<sup>エイ</sup>於<sup>ニ</sup>漢<sup>カン</sup>一<sup>ヒト</sup>王<sup>オウ</sup>昭<sup>ショウ</sup>君<sup>クニ</sup> 4 705 辺<sup>ヘン</sup>一<sup>ヒト</sup>風<sup>フウ</sup>吹<sup>フキ</sup>一<sup>ヒト</sup>断<sup>タン</sup>
- これらの、小圈は濁点と おなじく、すくなくとも 二次にわたつて ほどこされた ものと おほしく、その おそきものでは 文明・永正のころより いちじるしく くだる ものでは なからう。その 標示するところは、ひかへめに いふならば、そ

の直前に促音(このばあひは、入声音といつてもよい)もしくは撥音をともなふことのしるし、急呼するならば半濁音となるであらうところの音をあらはすものといへよう。つねは非濁音をしめす小園がかかる標示にもちゐられることは、訓点資料において濁音標示にもちゐられた<sup>✓</sup>が註画讃において促音にもちゐられるにいたつたと軌を一にする。また、それは、つねは濁音をしめす、が、興聖寺本<sup>\*</sup>大唐西域記や大東急記念文庫藏本<sup>\*</sup>蕪悉地羯羅供養法唐平七年点や興福寺本<sup>\*</sup>大慈恩寺三藏法師伝承徳三年点において、はな、にぬける子音や鼻音的撥音(ウまたはイに附せられたばあひ)をしめすばあひに應用されることほばおなじ意味の転用といへよう。〔\*は吉田金彦・築島裕両君の、\*は後者の發表論文にしたがふ〕

註画讃の同符号と朗詠集のそれと、またキリシタン文献のそれと、はたしていかなる系譜のもとにおいて関聯するものなるかいまにはかに証明をなしえないが、一般的な非濁音標示の符号を、直前に促音(入声音)・撥音をともなふばあひにかぎって使用し、結果的には半濁音の標示をなすにいたつたことは自然発生的に一致したものとみることもできよう。共通していへることは、註画讃も嘉吉二年本朗詠集も類書に隔絶して発音に忠実であり、個々の語に対して分析的であつた、といふことであり、そのやうな文献は濁音表記もあひとまなつてくはしいといふことである。勿論、この点に關しては、キリシタン文献の精はすべての節用集のおほらかさと比較を絶する。これ、後者の古抄本に半濁点の標示がたえてみえない因とすべきであらう。

八

四七にのべたごとき特徴的な写音法をもつこの註画讃は、慶長九年刊中野版や天和三年刊鱗形屋版と行文酷似するゆゑに、あるいはそのうつしではないかといふことをうたがふ読者もあらうかとおもひ、ここにそのしからざるゆゑんを略説する。

(1)木活字版以来、中野版・鱗形屋版にいたるまで、本文冒頭の日蓮の称を蓮師と称するが、この本のみ日れんとする。

他本は地の文において日蓮を主格とするとき、尊師・元祖、もしくは聖人、日蓮聖人をもちる、日蓮とのみよびずてにすることはほとんどない。しかるにこの註画讃はしやうにん、にちれんがあひなかばし、まれにぐわんそ<sup>⑥</sup>とする。簡略表現ともいへようし、客観描写ともいへよう。いづれにせよその素朴さよりすれば、宗門の布教書としては整備以前の段階に属することが帰結されよう。

(2)中野版には短絡とみられる箇所がかなりおほく存する。それらのおほくはこの本の一行文乃至二行分に相当する。この本が中野版のごとき母胎からでたのではないこと自明であらう。(大字ノ部分ハ中野版ニミエヌモノ)

2-1 御なは。せしやう。のちに。みづから。日れんと。あらため。たまふ。②〔中野版ハ幼名薬王丸カラタダチニ日蓮ト改名シタ文脈ニナル。古活字版ハ名是性或作生又作正字蓮長、後日改日蓮ニツクル〕

2-2 しょ／しうの。<sup>\*</sup>くはんそ。とふ。(中略)<sup>\*</sup>ふつぼうの。あ

だと／なる。これを。せめんと。おほし／めし。みをすて。いのちを。すつるの。せいぐわんを。たて。④〔中野版ハ、文意不通。古活字版ハ 故恐弘法中忍之誠責、立不惜身命之誓願ニツクル〕

2-3

ねんふつ。むけん。せんでんま。とう／の。ほうもんを。つふさに。きやう／るんの。もんを。ひきあわせ。のたまへは。④〔中野版ハ、文意ヤヤ不通。古活字版ハ 具校合經論文、折伏ニツクル〕

2-4

かけのふ〔中略〕また。ひたりの。御／てを。うちおる。御だんな。くたう／さこん。一そく。五十よき。はせ／きたり。日れんを。いたき。とり／たてまつり。あまつ／の。むらに。おくり。御きすを。つくり。⑪〔中野版、文脈不整、前後不照応。古活字版ハ 及加刀杖者之難是也 トイフ注釈ヲクハへ、下文ヲ 依檀那工藤左近丞被害、一族五十余騎馳來、送元祖於天津之宿所ニツクル〕

2-5

すこしも。さいし。けんそくを。おもふ事。なかれ。けんい。おそる。事なかれ。⑬〔中野版、文意不通〕

2-6

しやうにん。のたまわく。むかい。のりやう。くわんほう。てんこくの／きやう。ひんほう。あつけんの。たう／りやうはう。〔中略〕とふの。あくひく。とふに。うつたへられ。⑮〔中野版、太字ノ部分ヲ欠如シ、誹謗悪見の道隆房ニツクル〕

2-7

こゝに。しけつらが。らうとう。おちの／さふらふ。さへもん。なをしけ。すてに。御かふへを。はねんと／す。そたち。おれて。ちにおつ。てあし。うごかず。けい

こ／の。ふしら。たま。しいを。けし。ちに。たおる。⑯

2-8

うら。ないしや／の。申さく。〔中略〕さなくんは。せけん。あしかるべし。ゆる。さる。へしと。いふ人も。あり。五百にちの。うちに。いく／さ。あるへしと。申せは。それ／を。まつへしと。いふ人もあり。と。かたりき。⑰〔中野版、文意ヤヤ不通〕

2-9

しやうにん。の／たまわく。〔中略〕いそぎ。のほつて。かうみやう。せよと。しけつら。あハて。もの。いわず。しか／るに。きよねん。十一月。むほん／の物。ありしか。ことし。二月／十一日に。きやうと。かまくらに。／おゝきなる。あくさあり。⑱〔中野版、太字ノ部分ヲにのたまひしかは。案のことクニツクルノハコノ本ノ文意不明ヲアルイハアラタメタモノカ？古活字版 重連漣不言懷猶予歸然去年十一月有謀叛者ニツクル。有者ハアリテヘレバトナルベキモノトオモハレル。〕

2-10

それ。ひかし／にハ。あまこのたけ。日をか／し／ふもとにハ。ふしかわ。きたより。みなみに。むかつて。なかれ。なかれ／の。はやき事。おふゆみの。やを／はなつより。なをはやし。⑳〔中野版、第一ノ太字ノ部分ヲのニツクル〕

2-11

十二日の。とりの。こくより。みそう／の。大まんたらに。むかつて。ほく／めんしたまふ。十三日の。たつのこく／に。はうへん。ぼんを。しゆし。㉑〔中野版、事実ニ相違セリ〕

(3)この本には、以上のほかにも つぎのごとき 佳処が みられる。

3-1

しやうにん。又大おんしやうをいたして。ねんふつ。  
しんこん。「ぜんりつのはうほうハ。ことに。りやう。  
くわん。あめふらさ。さるノ事。さんけん。せしさま。つ  
ふノさに。のへたまふ」⑩〔中野版ハ引用符内ヲ、禪宗。律  
宗等の。はうほう。ことに良観が雨ふらざること。つぶさにざ  
んげんしたまへはニツクル、讒言ト降雨ノ主体トガ不  
分明ニナリ、文意 通ジガタイ。コノ本ノ はうほうハノハモ  
行カ。ココハ 三ヶ条ヲ 列挙シタモノデ ナケレバナラス〕

3-2

ふんノゑい。九ねん。みつのへさる。正月ノ十六日に。  
たうこく。ならひに。りんノこく。ゑちこ。しなの。と  
うの。ほうノそく。ありの。こく。あつまり。つかノわ  
らに。つとふ。⑪〔ありのごとくハ 蟻の如くデアラウ。古  
活字版 蟻聚、良賤蜂飛、幅湊塚原ニツクル、中野版ノ 原由ヲ  
直接 古活字版ニモトメルノハ 無理デ、アルイハ コノ本ノあ  
りのごとくヲ、ヨリ オトナシイ 和文調ニヤハラゲルトキノ  
ケヤレスミステクニモトツクノデハ ナイカ。タダシ、コノ本  
ノほうぞくハ 語義不通。中野版・古活字版トモ 僧俗〕

3-3

そのうち。二月十八ノ日。ほんまか。一そく。つかわら  
に。きたり。たなごころを。あわせて。「たすけ。させ  
たまへ。さんぬる。正月十六日の。御ことは。此。あい  
たは。うたかひ。たてまつるに。三十日に。たらすして。  
あいぬ。(中略)なかく。ねんノぶつ。申へからす候。」日  
れんノたまわく。⑫〔たなごころをあわせてハ直接、た  
すけさせたまへニカカリ以下ノ 会話文ヲ 誘導スルモノト  
カンガヘラレル。シカルニ、中野版ハ コレヲ 今日ごころをあ

はせてニツクル。ナンノアヤマリデアラウカ、文意不通ト

イフベキデアアル。古活字版合掌言、扶去正月十六日御語、此間

奉疑、不足三十日符合ニツクル。コノ扶ハ 解読不能。中野版

ノ今日ト、コノ言扶トアルイハ 関係アルカ?

(4)中野版は 次下の 諸話の 末尾を 欠如するために はなし全体が

しりきれとんぼとなり、次話への つづきが スムウスにおこな

はれない。

4-1

そのうち。ゑちノに。とまりて。廿よにち。そのあひ

だは。かまくらに。なに。物の。わざ。やらん。ひを。

はなつ事。七八ト。人を。ころす事。かへす。しよ人。

申やうハ。日れんが。てし。たんなの。わざ也。日れん

ノがてしたんな。かまくらに。おくへノからす。とて。

おふかた。二百六十ノよ人に。しるし。みなとをく。なか

すへし。ろくに。ある。でしども。かふへを。はぬへし

と。さためノらる。しかれども。此。あしき。わざ。ね

んぶつしや。ともか。いたす事也。⑬〔古活字版、コノ全

文ヲソナヘルホカ、末尾ニツギノ一文ヲ有スル。去孟夏聖識

不虛者乎、上宮大子記良弓箭器奪蒙古國懸鑿可恐矣〕

4-2

りうぞう。ことくく。つまれり⑭〔古活字版、コノアト

ニ第二回ノ元寇ニ関スル長文ノ記事ヲ有スル〕

(5)第十六話の 末尾、この註画讃は つぎのごとき 短文にてむす

ぶ。

たつのくち。にして。くびを。きる事ノし、はう。み

やうじん。むかしとくノりうにて。人を。くい。たまひノ

し。ゆへなり

しかるに、中野版は つぎのごとき 長文で、しかもとつてつけ

た感がせられる。

かるがゆへに。聖人は上行菩薩の再誕にて。大事の妙法をひろめたまへハ。大なん又いろをます。すでに仏意にかなひ給ひ。天神地祇も。守護をくハへ。此大なんをまぬかれ御いのちつゝがなぐましくて。法華経を天下にひろめ給ふも。末世のしゆじやうか。仏果をうべき。ぜんさうなり

いづれを先出とすべきか、論ぜずしてあきらかであらう。「古活字版 江島ノ起原伝説 二閑スル 長文ヲ 掲載、コノ本ノ記事ハ ソレヲ モットモ 簡略ニ シタモノト イヘヨウ」

なほ、第十九話の末尾 ちかく この註画讃が「上らிரりやうとの。るさい。くわん／＼ちほんの。そく／＼けん。ひんしゆつ。の。そく／＼の。二しに。あたれり」とするところのもの 末文「二じにあたれり」を 中野版が「二字。しば／＼とよむ。是我身に当候と。有かたく候」につくるのも、あらでもの註釈がましく、つぎの「聖人曰」への つづきぐあひも スムウスではない。「古活字版ハ コノ 注文ヲ 有シナイ。タダシ、ツギノ一文ヲ ツケクハヘル。聖人云、此三天事非日蓮申唯偏釈迦如来御魂入代我身、乍我身喜余身焉」

(6)第七話、証空法師が師の 生命にかはって 死することをもとめられ、即座に 快諾する ときの 語に、両本とも 「いのち。すてん事。やすから。ざらんや」とあるのは、首肯しがたい。往々みられる、反語表現に 際しての 表出の あやまりであらうこと 推察に かたくな。古活字版は「空法師謂、為法捨命、大士之常、況貨師死、我何遜乎」につくる。

(7)叙上 みるごとく、この註画讃も 中野版も 漢文体の 古活字版

による 直接の やはらげとは みなしがたい。漢文に ありがちな 文飾に 属する 部分、注釈・挿話に 類する 枝葉は つとめて カットし、本すぢのは なしだけを 大局的に 把握して 後代につたへようとした 態度が 顕著に うかがはれる。勿論、みぎの ことなりをもって 本質的な 相違と みるならば、あへて 漢文体を 祖とする 意味での 一元説を 固執するには およばない。和文脈の かつた 絵巻系と 漢文体を うけた 古活字版とが、同時代 ことなる 階層にならび おこなはれたとしても 決して 不思議ではなく、かへって その 方が 現実にあつた 想定である かもしれない。その 際、この 註画讃はその 行文の 簡古なる 点において かなりの 発言権を 有するのではないか？ とまれ、内容的にも すこぶる 興味の もちうる 本である。

問題を この 註画讃と 中野版とに かぎって いふならば、既述の かずかずの 短絡と 佳処とから すれば、中野版があるいは この本、もしくは この本と 同体裁の本を 母胎として つくられたであらう ことを 推定するのも あながち 臆断とはいへなからう。

## 九

この 註画讃と 中野版との あひだには つぎのごとき 語彙的対立が みられる。

くびかし<sup>25</sup> ↓ くびかせ    あなづる<sup>20</sup> ↓ あなどる  
きおつて<sup>14</sup> ↓ きそつて    ともうち<sup>15</sup> ↓ とうち

一般的意味では 第一群が 一時代まへの かたちとされる。その他 の いちじるしい 語彙的事実としては 次下が 指摘される。

やまふをうけ<sup>⑦</sup> やまふの。おこりをしらすして<sup>⑭</sup>〔以上、中野版モ 共通。やまひハ<sup>⑥</sup>⑦⑧ ソノ他ニモ ミエル〕 たぐらびなし<sup>①</sup>類なし<sup>⑮</sup> ぶきやう。<sup>\*</sup>ところ「奉行所<sup>⑮</sup>⑲⑳㉑㉒」ともうちどしうち<sup>⑮</sup>⑲ さやはひなるかなやーさいはひなるかなや<sup>⑮</sup> さゆわひに<sup>⑰</sup>幸に<sup>⑳</sup> ちうりくを。なだらめてーくび。きる事を。ゆるさんとて<sup>⑲</sup> きやうてい<sup>⑳</sup>⑲。けふでい<sup>⑲</sup>⑳(きやう。てい。四人ニハだト傍書ス)兄弟 とんに<sup>㉑</sup>頓に<sup>㉒</sup> ⑳

むまの。うへにて。うずくまる<sup>⑳</sup>のよつがなが双方ともにただしいのはめでたく、第九話にみえるせいせいは今日一様にスイセイといふところの 慧星の 一音であること、平家物語屋代本および百二十句本のうち、慶應本のしめすとほりであり、それはまた 字類抄・名義抄にもみえる。(平松本および百二十どはケイ)

語法的事実としては、

これは。はう／ぼう。がいけの。ことば也。ほけ／きやうへ。たいして。せう也。⑧が、かの 天草本イソホ物語の 冒頭「誦誦の人へ対して書す」と 同趣の、当時としては 比較的あたらしい 語法である ことが 注意される。

形容詞の 終止形が シシでしめされるものは 一例みえる。きく人／みな。申さく。此御はうハ。しん／つうの人也。おそろし／く。㉑〔中野版ハ おそろしといひ〕

連体格が 格助詞の を介して 体言に つらなる 用例には つぎのごときが みられる。

みをすて。いのちを。すつるの。せいぐわんを。たて。④

大もふこ。ごくより。につばんごくを。おそふべきの。てう

きたる。⑫

いろを。このむの。おんな。⑭〔中野版ハ 色このみの 女也〕

しさい。な／どに。おこ。なわる。事候てハ。御あつか

り。のため。あしかるへく／候。の。あひた。⑰

あなつべき。るにんに。あらず。の／よし。⑲〔中野版ハ あ

などるへき 人にあらざるの由〕

しやうと。しうの。たんきを。はしむる／の。みきり。なれ

は。⑲

さとの／くにの。る人のそう。日れん。で／しを。みんそつ

して。あくきやうを。たくむのよし。その。きこへ／あり。

⑳

なを。もつて。い／ほんの。物おは。ちうしん。せらる／へ

き。のよし候。㉑

らく／中にして。人を。くらうの。よし。ろけんの。あひ

だ。㉒

濁点長二点の 加点者は「怪しみを致す」といふべきところを「怪しみをいだし」⑨⑱といふくせがあったやうである。それは 多分に 出すといふ語を 念頭に おいたための 変化であらう。これが 既述の 濁音化クズン(医・コザメ(小雨)など)や 促音便の おほい 事実とあひまつて、点者を 東北地方の 出身者に 擬すべきやいなや、にはかに 断案を えない。イ↔エの 交替が ほとんど みとめられない 事実は、あるいは みぎの 推定の 反証と すべきものか。しかしながら、サイハヒ↔サユワイ・ナゴヤ↔ナゴイ(地名)の 交替現象から すれば なほ 非中央語の 反映と すべきであらう。

この註画讀はその後アメリカにわたり、ニュウヨークパブリックライブラリにをさめられたと仄聞する。

昭和四十六年一月二十四日稿了

〔追記〕 四でふれるところのあった濁点の三点資料は今後みるにしたがってそのかずをますであらう。稿後週日にして次下をえた。

精選秘用方第六

天正拾九年二月吉日 だけ田ほう印 山田勘右衛門家秀 (花押) の識語あり。朱墨にて二点多用のうち、一ヶ所に三点あり。卷七・八には一点を頻用する。句読周密。

職原 鈔上平等心王 二点多用のうち、三点使用例一あり。

明衡拔書藤設家 二点使用のうち、三点・四点をもちめた例がそれぞれ一例みえる。

和漢朗詠集名書本 二点使用のうち、墨書三点の例すくなくとも三例みゆ。

倭漢朗詠集私注 大永八年与州矢野保日土にての古写本 西庄文庫・安田文庫旧藏本 二点多用の間にすくなくとも五例あり。

倭漢朗詠集私注松之家 二点多用の間にすくなくとも一例、三点の例がみえる。

唐宋聯珠詩格殘 卷十一 十六本 三州宝飯之郡牧山村にての書写本 四点・五点の間にまれに三点もみゆ。

同 (卷九・二十) 二点の間に三点の例すくなくとも一例みゆ。

錦繡 段慶長廿年五月常州 二点の間にその変化としての三点・四点をまれにまじふ。

同 天正二十年高野山南谷福善院にての古写本 常州佐竹大窪住玄齋形具のための書写本 二点の間に別筆として三点使用の例一みゆ。また、漢字の濁音をしめす声点に変形三筆をもつてせるあり。

山谷詩集殘 存二本 二点多用の間に三点すくなくとも三例あり。(卷十一・二十)

江湖風月集 尾題「江湖禪林風月集」 書賢寮十六歳(花押)の識語あり。二点に、三点・四点をおほくまじふ。フウ(鈴)・キウ(鳩)の例もすこぶるおほし。

集千家註批点杜工部詩集 殘存本五冊 (卷五・七・十・十一・十二) とも一例みゆ。

黄石公三略 下巻末尾佚 二点の間にすくなくとも三点を二ヶ所まじふ。

御成敗式目 室町末期写 追加一に、漢字に三点をほどせる例みゆ。

雑筆 抄 東大國語研究室藏本 二点少少の間に三点一例みゆ。書寫景口之の識語あり。

塵芥集 村田本 冒頭に五ヶ所末尾にちかく二ヶ所および敬命新写本 白起請文に四ヶ所 三点がみえる。なほ、中世法制史料集第三卷 武家家法Iの解題によれば、佐藤本は二点の間に一ヶ所だけ三点をまじへるよし。

〔再補〕

一、濁点の三点資料が、四点から二点にいたる過渡のものとしてのみとらへられるべきものかいなかについてはすくなくならず疑問の存するところ。本文および追記にかかげた諸例によつてもしか速断すべからざることはあきらかであらう。なほ、この類の資料は、同時代のゆゑか、興をキウとし、るすごとき資料とかさなることがおほい。解決の一方ををしめすものかともおもはれる。

二、校正に辱知三君の協力をえた。なかんづく、酒井憲二君は四点・五点の筆順について新解釈をあたへ、また、能楽資料布留・阿古屋・難波を写真で実査してくれた。労を多とし、功に謝する。

——前日本大学教授——

